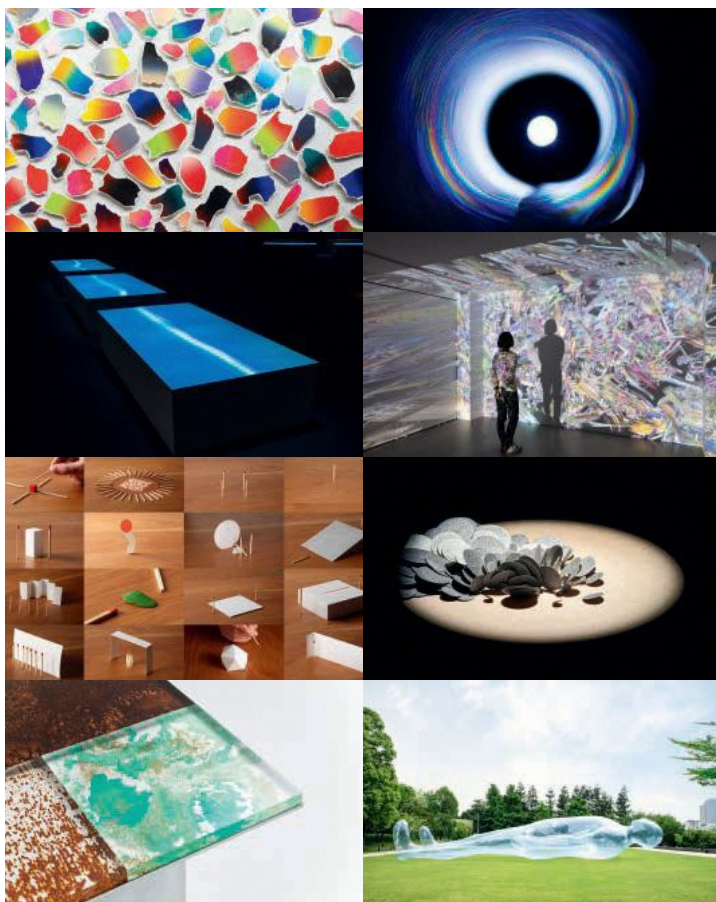


TAID Letter 20



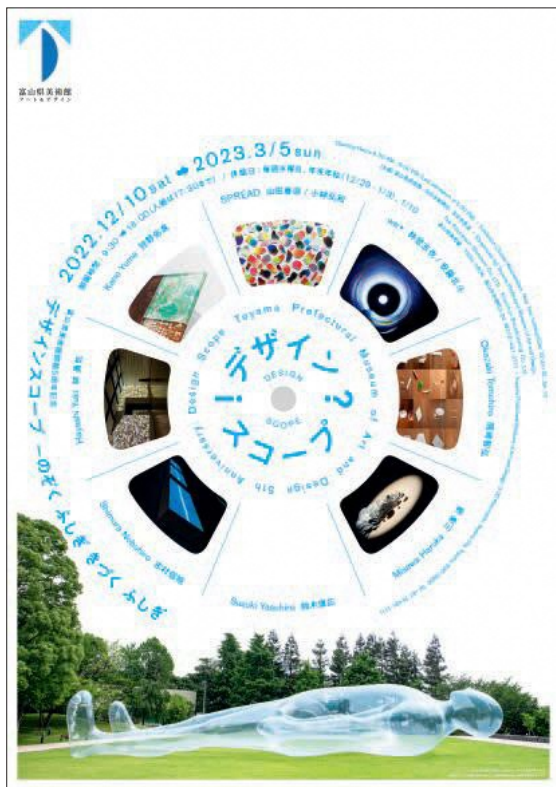
富山県美術館
アート & デザイン



富山県美術館開館5周年記念

デザインスコープのぞく ふしぎ きづく ふしぎ

2022年12月10日(土) - 2023年3月5日(日)



ポスタービジュアル Design: 永井裕明

はるか遠くの星々を観測できる望遠鏡 (telescope)、微生物や細胞を観察できる顕微鏡 (microscope)。人間はさまざまなレンズを用いた器具を使うことで、自らが認識できる世界を拡張し、新たな技術や価値観を生み出してきました。本展では、「デザイン」というレンズを通した視点を「デザインスコープ (design-scope)」と名付け、第一線で活躍するデザイナーやアーティストと対話を重ね、これからデザインがどのような提案をすることが可能なのか、またデザインとアートが限りなく近づく現在の状況を、ミクロ/マクロの視点から俯瞰します。そして、本展のために新たに制作された作品や、音や映像などを用いた、空間全体を楽しむことができる展示を通して、デザインとアートの持つ創造的なエネルギーを体感し、楽しさや驚き、次世代に向けた可能性を、ここ富山の地から発信します。

出品作家 (8組10名 ※50音順)

ウーラス はやしとしや あんどうはくと わかさきともひろ かのうゆうま
we+ (林登志也・安藤北斗)・岡崎智弘・狩野佑真、
しむらのふひろ すずきやすひろ スプレッド こばやしひろかず やまだはるな
志村信裕・鈴木康広・SPREAD (小林弘和・山田春奈)、
はやしゆうき みさわはるか
林 勇気・三澤 遥

開催概要

開館時間 9:30 - 18:00 (入館は17:30まで)

休館日 毎週水曜日、年末年始 (12/29~1/3)、1/10 (火)

会場 富山県美術館2階 展示室2、3、4

主催 富山県美術館、北日本新聞社、北日本放送

観覧料 一般1,100 (850) 円、大学生550 (420) 円、

高校生以下無料 ※ () 内は20名以上の団体料金

イベント情報

「デザインスコープ」展の会期中、さまざまなトークイベントを開催します。

12月10日(土) 鈴木康広 × 川上典李子 (富山県美術館 デザインディレクター)

12月17日(土) 狩野佑真 × 宮前義之 (A-POC ABLE ISSEY MIYAKE デザイナー)

12月24日(土) we+ (林登志也、安藤北斗) × 志村信裕

12月25日(日) 林 勇気 × 以倉 新 (富山県美術館 学芸課主幹) ※ギャラリートーク

1月14日(土) 永井裕明 (グラフィックデザイナー) × 川上典李子

2月11日(土) 三澤 遥 × 武井祥平 (nomena代表取締役、エンジニア)

2月18日(土) 岡崎智弘 × SPREAD (小林弘和、山田春奈)

3月4日(土) 桐山登士樹 (富山県美術館 副館長) × ゲスト (未定)

[同時期開催] 林勇気「もうひとつの世界の見方 002・ワークショップと展示」

●館内無料ゾーン展示: 2022年12月10日(土) - 2023年3月5日(日)

●3階ホール展示: 2022年12月25日(日) - 2023年1月9日(月祝) (12/28~1/4は休館)、および1月14日(土) - 29日(日)の土日は開催します!

●観覧料: 無料

※ワークショップは終了しました。※イベント開催等により臨時閉場する場合があります。当館ホームページやSNS等をご確認ください。

（ 見どころと出品作品 ）

POINT

アートとデザインの現在地を「のぞく」展覧会

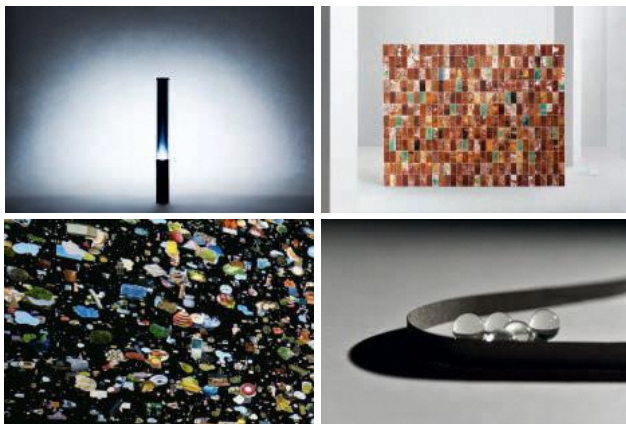
- 東京ミッドタウンや金沢21世紀美術館で展示されてきた、鈴木康広による全長25mを超える巨大で透明な人物像《空気の人》。
- NHK・Eテレ「デザイン あ」で「解散!!」コーナーの企画製作を手掛ける岡崎智弘による、コマ撮りでマッチ棒が自由自在に姿を変える作品。
- 万華鏡から着想し、現代のLED 照明や光学技術を取り入れて進化させたwe+の作品。
- 「WHO ARE WE 観察と発見の生物学 国立科学博物館収蔵庫コレクション | Vol.01 哺乳類」の展示デザイン・構成でも知られる三澤遥による、紙が意志を持ったかのように動きまわる「動紙」シリーズの最新作。

第一線で活躍するデザイナーやアーティストらが、自らの分野のこれからの姿を模索した作品を通して、限りなく近づくアートとデザインの現在地が見えてきます。

私たちの生きる世界にミクロの視点／マクロの視点から「きづく」展覧会

- 金属の鋳を、ジーンズの生地にも独特の模様として転写し、自然の変化の魅力をテキストスタイルに取り入れて意表をつく狩野祐真。
- ネット上にあふれる膨大なデジタル画像を切り抜き、展示室いっぱいに浮遊させて、不可視のデジタル環境に取り巻かれた現代世界を優れて体感的に想起させる林勇気のスペクタクルな映像インスタレーション。
- 展示室を鮮やかな色のパーツで満たし、空間感覚を色彩によって拡張するSPREAD。
- ベンチの上に投影された青い光の帯一静かに揺らめく、幻想的な光の知覚体験が、私たちの記憶や感覚を呼び覚ます、志村信裕の映像インスタレーション など…

デザイナーの視点、アーティストの視点から見た多様な世界の姿は、我々に新鮮な驚きを与えてくれることでしょう。

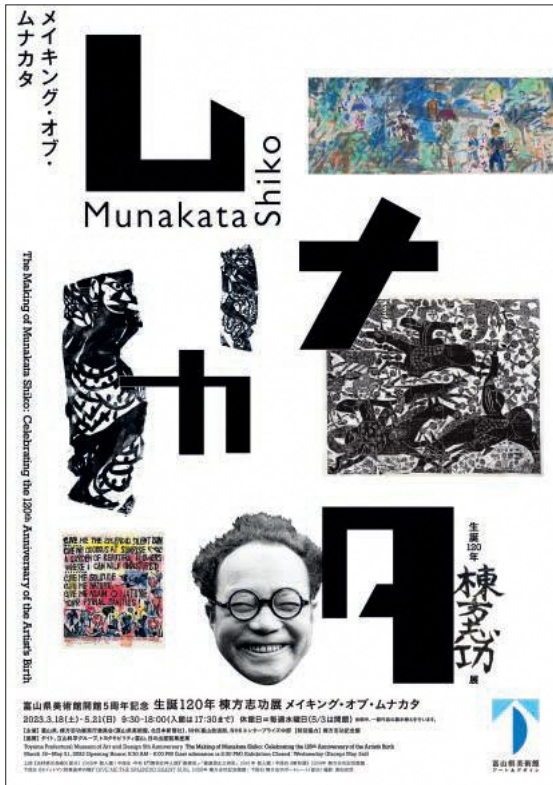


上 左上から順に: we+ 《Peep》2017年 photo:林 雅之 / 狩野祐真 《Rust Harvest》2018年 photo:Gottingham / 林 勇気 《another world -alternative》2017年 (部分) photo:木奥恵三 / 三澤 遥 《紙が動くと》2022年 photo:本山真帆
表紙 左上から順に: SPREAD 《Much Peace, Love and Joy》2021年 photo:神宮巨樹 / we+ 《Peep》2017年 photo:林 雅之 / 志村信裕 《Blue Hour》2021年 KAAT神奈川芸術劇場での展示風景 photo:Ken Kato / 林 勇気 《Image Data - A to Z》2017年 Gallery PARCでの展示風景 photo:薬生田兵吾 / 岡崎智弘 《Matches Wall》2022年 / 三澤 遥 《動紙》2018年 photo:林 雅之 / 狩野祐真 《Rust Harvest》2018年 photo:Gottingham / 鈴木 康広 《空気の人》東京ミッドタウン芝生広場、2018年 photo: 鈴木康広

富山県美術館開館5周年記念

生誕120年 棟方志功展 メイキング・オブ・ムナカタ

2023年3月18日(土) - 5月21日(日)



ポスタービジュアル Design: 永井裕明

「世界のムナカタ」として国際的な評価を得た版画家・棟方志功(1903-1975)の作品は、今なお根強い人気を誇ります。一心不乱に板木に向かう棟方の姿は、多くの人々の記憶に刻み込まれているのではないのでしょうか。棟方が居住し、あるいは創作の拠点とした青森、東京、富山の3つの地域は、それぞれに芸術家としての棟方の形成に大きな影響を与えました。福光町(現南砺市)には、1945年4月に疎開し、6年8カ月の期間をこの地で過ごしています。棟方の福光疎開については、県内ではご存知の方も多いかもしれませんが、版画や倭画(肉筆画)の重要作を制作し、創作活動の転機となったことはあまり知られてはいません。

棟方の生誕120年を記念して、各地域の美術館(当館、青森県立美術館、東京国立近代美術館)が協力して開催する本展では、棟方と各地域の関わりを軸に、棟方の多岐に渡る活動を紹介し、棟方志功とはいかなる芸術家であったのかを再考します。

棟方は1942年以降、自身の版画を「板画」と記すようになりました。これには、「板の生まれた性質を大事に」扱うという思いが込められており、自身の作品が一般的な版画とは別物であるという意識を抱いていたことを示しています。棟方の板画には、私たちが思い浮かべる版画を逸脱、超越する作品が少なくなく、横幅約13メートルに及ぶ《大世界の柵》(棟方志功記念館蔵)などの超大作は、本展の大きな見どころの1つです。棟方は板画、倭画、油彩画といった様々な領域を横断しながら、本の装丁や挿絵、包装紙などのデザインの仕事も数多く行いました。本展では棟方が手掛けた貴重な装丁本も数多く展示し、棟方のデザイン感覚や、時代や人との関りも紹介します。

開催概要

開館時間 9:30-18:00(入館は17:30まで)

休館日 毎週水曜日(5/3は開館)

会場 富山県美術館2階 展示室2、3、4

主催 富山県、棟方志功展実行委員会(富山県美術館、北日本新聞社)、NHK富山放送局、NHKエンタープライズ中部
特別協力 棟方志功記念館

観覧料 一般1,500(1,200)円、大学生1,000(800)円、高校生以下無料

※()内は20名以上の団体料金

イベント情報

会期中のイベントの詳細は、当館ホームページやSNS等でお知らせします。

見どころと出品作品



左上から順に：《大和し美し》「倭健命（やまとたける）の柵」1936年 日本民藝館蔵
 《ホイットマン詩集抜粋の柵》「Title Page」1959年 棟方志功記念館蔵
 《門舞頌》「多紀理毘賣命（たきりびめのみこと）」1941年 個人蔵
 《華嚴松》1944年 光徳寺蔵 / 《花矢の柵》1961年 青森県立美術館蔵

POINT

棟方志功の代表作が集結

日本民藝館、棟方志功記念館、青森県立美術館などから、棟方の代表作が集結します。《二菩薩釈迦十大弟子》は、日本民藝館と東京国立近代美術館からそれぞれ拝借し、改刻前後の作品を、会期の前半と後半で展示替えを行う予定です。

福光ゆかりの名品

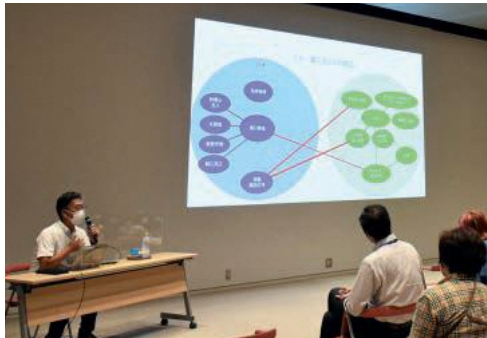
棟方が疎開した福光から、倭画（肉筆画）の傑作である《華嚴松》（光徳寺蔵）、福光駅から光徳寺の分家（当時の棟方の住居）までの道のりを描いた《法林経水焰巻》（個人蔵）、棟方が福光駅のために揮毫した書作品《無事》（福光美術館蔵）を拝借して紹介します。

版画の超大作

棟方志功は、一般的な版画の概念からは想像もつかないような版画の大作を数多く制作しました。当館の広々とした空間で《東北経鬼門譜》（日本民藝館蔵）、《門舞頌》（個人蔵）、《大世界の柵》（棟方志功記念館蔵）などの大作をご堪能ください。

イベント開催報告 1

「ミロ展—日本を夢みて」関連講演会



ミロ展会期中、本展企画者である副田一穂氏、同監修者の松田健児氏をお招きして講演会を開催しました。

副田氏は、ミロの生涯と作品の変遷を追いつつ、本展のメインテーマである日本との関わりについて、ミロの訪日時の足取りや作品に与えた影響を解説してくださいました。また、幼少時に連れられて見たミロの絵をきっかけに研究者になったという素敵なエピソードも。

松田氏からは、ミロと瀧口修造の交流について、最新の研究をふまえて詳細にお話しくださいました。その中で、スペインのカタルーニャ地方と日本の間の人脈の広がりにも言及されました。熱量に満ちた講演に、聴講者からもお話に引き込まれたとの声が聞かれました。

- 2022年7月16日(土)「ミロの見た日本、日本の見たミロ」
講師：副田一穂氏(愛知県美術館主任学芸員)
- 2022年8月6日(土)「ジュアン・ミロと瀧口修造」
講師：松田健児氏(慶應義塾大学准教授)

イベント開催報告 2

「西洋絵画400年の旅—珠玉の東京富士美術館コレクション展—」関連講演会

展覧会が開幕を迎えた当日の2022年9月17日(土)に、東京富士美術館長の五木田聡氏による講演会「名画を旅する60分」を開催しました。

16世紀頃の西洋絵画には「ジャンル」があり、それによるランク付けがなされていたこと、そのジャンルの序列などの決まり事が、近現代へと時代が進む中で画家が描きたいことを描くという方向に変化していくことなど、400年に渡る西洋絵画の流れを展覧会出品作を始めとした豊富な図版で紹介されました。各作品の注目ポイントなどもお話しいただき、再度作品をじっくりと見たくなる講演会でした。



いろいろやっ展^{てん} みる+つくる+発表する アトリエ・ドキュメント2022

2022年12月17日(土) - 2023年1月15日(日)

富山県美術館では、美術作品の鑑賞だけではなく、アトリエを中心とした、みる・つくる・学ぶといった双方向的な美術の体験活動を、年間を通して提供しています。本展では、各種プログラムの実践を報告パネルや記録映像などにより紹介するとともに、そこで制作された作品を展示し、創作体験の喜びを伝え、新たな交流の場を創出することを目指しています。



昨年の展示会場の様子

開催概要

開館時間 9:30-18:00(入館は17:30まで)
休館日 毎週水曜日、年末年始(12/29-1/3)、1/10(火)
会場 富山県美術館1階 TAD ギャラリー
主催 富山県美術館
観覧料 無料

みどころ

2021年12月1日から2022年12月までの期間、当館にて実施した「TADワークショップ」「オープンラボ」などの教育普及活動に参加されたみなさんの作品や報告パネルを色とりどりに展示した展覧会です。
ご自身やお知り合いの方が参加されたプログラムを探したり、カラフルな展示風景や作品を撮影したり、自由にお楽しみいただけます。

紹介するプログラム

※()内は実施日または実施期間を表す。

TADワークショップ

- 加藤休ミ氏「The Cat Cart. ねこをつくって、ねこをはこぶ!〜クレヨンで描くワークショップ〜」(2022年2月11日)
- ギャル電・きょうこ氏「電飾看板ネックレスを作ろう! By ギャル電」(2022年2月20日)
- さとうあや氏「オノマトペを使って絵本をつくろう」(2022年6月26日)

オープンラボ

- 「合わせ切りでつくろう!ヘンテコいきものえほん」(2022年5月29日~7月15日)
- 「^{てんせんめん} / ◆で描こう!ミロの世界」(2022年7月16日~9月16日)
- 「ワクワクフレームをデコっちゃおう」(2022年9月22日~12月8日) ほか

アーティスト@TAD

- ビー・ウォーター・エクスペリメント「BE WATER」(2022年3月27日~5月8日)

Find TAD!プロジェクト (2021年4月1日~2022年3月31日)

「絵本原画ニャー! 猫が歩く絵本の世界」展 関連ワークショップ

PLAY EARTH PARK TOYAMA ワークショップ

(2022年7月30日~8月7日)

《ポーズの途中で休憩するモデル》 福田美蘭

2000年 バネル・アクリル絵具 145.5×227.2cm



©Miran Fukuda

ルーヴル美術館に飾られているレオナルド・ダ・ヴィンチの《モナ・リザ》は、誰もが知る名画である。別名《ラ・ジョコンダ》（ジョコンダ夫人）とも呼ばれるその作品は、技法やモデル、制作意図などの点で謎多き作品としても知られ、今日でも美術・名画のアイコンとして、オマージュやパロディが展開されており、作品イメージが様々な媒体で広く流通している。

美術の世界でも《モナ・リザ》に影響を受けた作品は多数ある。当館の収蔵作家を例にとると、マルセル・デュシャンは《モナ・リザ》の複製画にひげを書き加え《L.H.O.O.Q.》と題して作品化し、アンディ・ウォーホルは複数の大量消費のアイコンに選んだ。また、福田繁雄は手仕事による国旗の集合体で《モナ・リザ》が表出するポスターを制作した。

《モナ・リザ》にまつわる作品や事象は沢山あるが、福田美蘭による本作が他と全く異なるのは、上半身の女性を描いた現物作品のイメージを転用したのではなく、作品を基に想像して描かれた髪型や衣装を含む人物の全身像であり、誰もみたことがない制作中の様子を詳細に描いている点である。ポーズ中の神秘的なほほ笑みをやめて疲れたような表情をみせて

いるところや、《モナ・リザ》の画風を受け継いで描かれた広々とした風景など、レオナルドしか知らない世界が描かれている。名画の中の人物を、実際に生きた女性に還元するという意図が本作の見所といえるだろう。

本作の題名に《モナ・リザ》に関する言葉はない。それでも誰もが、《モナ・リザ》のモデルがしばし休息をとっている一瞬、名画が生まれるまでにあった制作過程だと気づくだろう。あるいは、アイコン化された《モナ・リザ》にも画家やモデルの実体があり、画家が持つ「描きたい」という純粋な欲求があったからこそ、現在名画と呼ばれる作品が存在するのをも感じとるだろう。

西欧・日本の名画をモチーフにユーモアや批評精神を反映させて描くのは、1990年代後半以降の福田の作風である。本作は、固定化された印象に新たな視点を加えて捉え方を全く変えるという画家の意図が存分に反映されており、代表作といえよう。

（学芸課係長 渡辺 希利子）